HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	有島武郎文学の研究 ： 女性を書くこと［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	張, 輝
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13694号
Issue Date	2019-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75102
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hui_Zhang_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　張　　輝

学位論文題名

有島武郎文学の研究　――女性を書くこと――

・本論文の観点と方法

本論文は有島武郎の文学に対して、小説作品における女性の表象を焦点とし、同じく男性表象のあり方や西洋文化に対する態度をも併せて考究することにより、新たな評価を与えることを目的とする。研究の対象は有島の主要な小説群を中心に置き、それに加えて多くの評論類や、その中でも特に女性雑誌への投稿にも言及している。

有島の小説における女性の造形は、初期においてはいわゆる〈聖女〉と〈娼婦〉の二つのタイプとして現れ、伝統的・類型的な表象として理解できるものであった。だが有島は創作追求の過程において、自らの女性表象の限界を意識し、それを超克しようとする姿勢を示すことになる。中期・後期にかけて、有島の女性を書く作業は、伝統的・類型的な表象から徐々に逸脱し、流動性・不確定性・相対化などの要素をより強く介在させることを大きな特徴とするようになった。

本論文は、それらの要素を個々のテクスト内部のみならず、テクスト間の関連性においても分析・抽出し、従来の有島文学に対する通説とはとは異なる新機軸の作品解釈を試みた。論述に当たっては、イヴ・セジウィック、ジュディス・バトラーらによるフェミニズム批評・ジェンダー批評・セクシュアリティ研究をはじめとする現代の文学理論・文化批評理論の方法を大きく援用するとともに、飯田祐子・小平麻衣子・平石典子らによる日本近代文学における女性の位相の研究を参照することにより、有島文学の物語内容と小説技法の面から、作品解釈を主体として検討を深めたものである。

・本論文の内容

本論文は、序論・結論と、本論全三部一〇章から構成されている。序論では、従来の研究を概観し、そこで明らかにされた、女性解放の支持者であった有島が他方ではミソジニー（女性嫌悪）を内に秘めていたとする両極性の問題を前提とし、有島自身がその限界を意識し、また男性である自分自身が女性を代行することにも懐疑を覚えていたことを指摘し、これらを着眼点として論述を進めることを確認している。

本論第一部では、少女の生を描く小説群に着目し、抑圧に抵抗する少女や女性の造形を考察した。第一章では、「お末の死」の母に国家が求めるジェンダー規範を認め、姉もまたそれに加担したと見なし、そこからの自由を求めたお末が自己破壊（自殺）によってのみ自由になりえた逆説を描き出した作品として評価した。ただし、有島はそのようにしてお末を永遠の少女像に仕立て上げ、お末は有島の少女憧憬に回収されてしまうとする。第二章では、クララは異性愛的な恋愛・結婚制度やそこにクララを閉じ込めようとする男性性からの脱出として出家するものと解釈する。クララは同じ女性であるアグネスや、他の女性とともに女性共同体を作ろうとしたのである。ただし、それは鑑賞される美しい少女の共同体であり、少女たちを聖の世界に封じ込めることであり、ここにも有島の少女世界への憧れや現実逃避が現れているとする。それに対して第三章で取り上げた書簡体小説『宣言』は、脱少女憧憬に向かうテクストとされる。人物ＡとＢとの間には男同士の義理（共犯

かつライバルというホモソーシャルな関係）があり、Y子を欲情しながら排除することによってこの関係を維持していた。だがY子の手紙によって女性の独立への萌芽が明らかとなり、ここに窺われる男性からの女性への啓蒙に対する懐疑的な姿勢は、後に『或る女』や『星座』において大きく前面に押し出されることになる。

第二部では、ジェンダーを越境する男女関係を描く作品が取り上げられる。第四章では絶縁状形式の姦通小説「石のひしがれた雑草」の主人公兼語り手のAを、男性中心主義であるとともに男性との競争に執着し、妻Y子と加藤との間の不倫を認定することによって主体を獲得するような人物として解釈し直した。第五章によれば、『或る女』における木村・岡らの男性人物群は、強い女性を欲するマゾヒズム的欲望を持ち、それによって主人公葉子を共有しようとする点においてホモソーシャルな枠組みに囚われており、「女王」と呼ばれる葉子はその枠組みによって抑圧される犠牲者でしかないと論じた。第六章では、『或る女』が近代女性の西洋的な教養の本質や、それが帯びる男性中心的な特徴を葉子の生のあり方を通して告発する小説にほかならないことを指摘した。船中での倉地と葉子は西洋の表象であり、葉子が憧れるアダムとイブの再演にほかならない。木部・岡らが葉子に魅了された理由も彼らの西洋崇拝に由来し、彼女の不倫も日本の伝統を転覆する美である。近代日本の西洋崇拝を有島は見事に男女の関係に還元してみせたとする。第七章では、『或る女』の女性たちの間に反復される闘争を問題とし、葉子が母親佐を、妹愛子が葉子を否定するための存在と見なされる。愛子だけは解釈できない寡黙な女であり、そこに男性が女性を代理表象することの不可能性が認められ、女性の啓蒙を相対化しようとする思想が既にここにも現れている。

第三部においては、主として男性による女性への啓蒙を相対化しようとする有島の姿勢を検討するとともに、有島の西洋文化に対する態度の変化をも見極めようとする。第八章では『迷路』を読み直し、アメリカ信仰から離れようとして葛藤する日本人を描く小説と見なす。優等者アメリカ劣等者日本という構図を前提とし、当初はアメリカ人となることを望んだAが、次にはアメリカに対抗し、さらに農場での異文化体験を経て、国境や人種を越える理想を求めるようになったとする。また、P 夫人との不倫による（嘘の）混血児の表象を分析し、混血児は当時の日本そのものの寓意とみなし、東西文明間の融合の可能性に対しても態度を保留する姿勢を確認した。第九章では『星座』を取り上げる。『或る女』に対して『星座』は日本回帰の傾向が認められ、唯一西洋主義の西山は全面的に否定されるが、これは当時の日本の西洋崇拝への批判の現れである。おぬいの家庭教師が星野・渡瀬・園と受け渡される過程には、女性教育が男性の女性に対する啓蒙であり、家庭教師が英語を教えることと、恋愛関係に陥ることとが結びつくという当時までに流行した男性中心的なパターンが露骨に示されている。ただし、家庭教師を断るとともにおぬいに求婚する園の造形はそれを相対化し、女性教育の従属性に対する批判意識を宿した作品と位置づけた。積極的に女性を啓蒙する風潮に参与していた有島が女性啓蒙を否定する作品を執筆したのは、一種の自己相対化と考えられる。第一〇章では、同じく『星座』において、女性啓蒙を相対化し、有島が構想する相互扶助において重要な役割を果たす女性としておぬいを規定した。星野の妹おせいは女中＝妾（予備軍）として近代社会から排除され、他人との関係が分断された女性として造形された。妾入りさせられる「かんかん虫」のカチヤや、強姦される「カインの末裔」の笠井の娘のような、声を奪われた女性を有島は描いてきた。星野によるおぬいへの期待は、他者との交流と階級間の差異の克服によっておせいの願望が達成されることをも示し、相互扶助は、従来論じられてきた園よりもむしろおぬいの課題であるとした。

結論では、有島の個々の作品や作品間の相互関係を分析することを通して、有島の女性を描く作業を把握したことを総括した。自己の男性としての限界を意識し、絶えずそれを相対化しつつ女性を書くことこそ、有島の創作活動の最大の特徴であると結論づけた。